

ミステリ読書案内

2024. 10. 20 発行元

第611号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

クリスタナ・ブランド「ベスト表」(再掲)

アガサ・クリスティの後を継ぐイギリス女流ミステリ作家として活躍したクリスタナ・ブランドの『ベスト表』を再度取り上げる。作品数は少ないものの「本格もの」のしっかりした内容の作品を残している。

イギリス本格ものミステリ

クリスタナ・ブランドが活躍した時期はクリスティの後半の時期と重なっている。その意味ではクリスティの後継者というよりは同時代のライバルのようにも見える。クリスティがミステリの歴史の中で果たした役割りの大きさは特別偉大だが、作られた作風で言うと、ブランドのミステリの方が私の好み合っている気がする。

そうは言ってもやはり「イギリス・ミステリ」の伝統に則った作品

だと感じる。都会のゴミゴミした舞台ではなく、地方の名家の人達が登場するような…。今日明日の生活に追まられる展開ではなく、のんびり休暇の時間を過ごすような…。今現在のミステリから見れば前時代の古典的ミステリということになるだろう。

以前の『代表作』の号では『はなれわざ』『自宅にて急逝』『ジェゼベルの死』の三作を取り上げた。今回は順番に従って『緑は危険』と『切られた首』にしてみた。

たぶん図書館や中古書店ではほ

《クリスタナ・ブランド・ベスト表》

1. はなれわざ ⑧
2. 自宅にて急逝 ④
3. ジェゼベルの死 ⑤
4. 緑は危険 ③
5. 切られた首 ②
6. ハイヒールの死 ①
7. 猫とねずみ ⑥
8. ゆがんだ光輪 ⑨

題名の後の丸数字は長編の出版順。日本語訳になっているのは、この他に『疑惑の霧』⑦があるだけ。全著作は14冊くらいかもしれない。

とんど手に入らなくなっているだろう。あとはネット上の取引になるだろうが、ものによっては希少になっていて高値がついているものもあるようだ。ミステリ古典に興味がある若者は探してみるのも良いかもしれない。

「緑は危険」

1943年の作。長編第三作に当たる。私の手元にあるのは1978年のハヤカワ・ミステリ文庫。この作品は第二次世界大戦時のイギリスの様子を取り上げたものである。ミステリに今まさに推移している現実を取り入れることは難しいものだが、ブランドはそれを上手にこなしている。

ドイツのナチスによるロンドン空爆が開始され、多数の死傷者が毎日のように増えていった。ケント州はロンドンの南東に接しており、大陸に最も近い場所なので、戦争の影響は非常に大きかった。冒頭に郵便配達夫のジョーゼフ・ヒギンスが登場し、戦時下の手紙のやり取りについての描写がプロローグのような形で出てくる。そして、舞台はケント州のヘロンズ・パーク陸軍病院となる。主な登場人物は外科医などの医師たちと看護婦、特志補助看護婦たちとなる。そこに運び込まれてくるのが郵便配達夫のヒギンス。戦火による大腿部骨折である。大怪我ではあるものの命には別条がないものと考えられていた。しかし、手術を進めていく中でヒギンスの呼吸に異常が出始め死亡してしまった。殺されたと考えられた。なぜ一人の郵便配達夫が殺されなければならなかったのか。そして、その方法とは…。「ケントの恐怖」と名付けられたコックリル警部の出番が回ってくる。パズラー(謎解き)としての手掛かりが物語の随所にバラまかれているので…。

「切られた首」

1941年の作。長編第二作に当たる。私の手元にあるのは1984年のハヤカワ・ポケットミステリの515番の再刊本。コックリル警部初登場の作品になる。

イギリス南部のダウンズにあるピジョンズフォード山荘が舞台。地主で独身のペンドックが館の主。そこへ画家のグレイス・モーランドや友人の双子の孫娘・フランセスカとヴィニシアなどが集まってくる。グレイスの描いていた教会の塔近くで、去年の夏、近くの家の台所女中が首を切られて死亡した事件があったことが触れられる。それは未解決のままになっているという。グレイスは館主のペンドックの気を引こうと考えているのだが、ペンドックの気持ちはフランセスカの方に…。夕方のお茶の時間に一緒に過ごしていると、フランチェスカが注文したという流行りの帽子が届けられる。グレイスはその帽子のデザインが突飛だったので「趣味が悪い」と評した。「そんなものをかぶって、溝にはまって野たれ死しているところなぞ見られたくないものだわ」と。この言い争いが夜に大事件に発展する。グレイスが館の庭園の片隅で首を切られて死体となることが発見されたのだ。その首にはあの奇抜な帽子がかぶせられていたという。コックリル(コッキー)警部はトーリントン警察署に所属する捜査官。この事件を解明しようと調べを開始する。